

【5】提婆達多の教団内での位置 (1) —— 他の長老たちとの関係

[0] 以下には、釈尊教団内での提婆達多の位置を、他の長老比丘たちとの関係と、破僧に追従した者を中心に調べてみたい。まず他の長老たちとの関係を調査する。

[1] 提婆達多と舍利弗との関係を表す資料には、次のようなものがある。

[1-1] その第一は、釈尊から提婆達多の行為は仏法僧ではないと公に知らせよとの顯示羯磨を命じられたときの、舍利弗の言葉に見られるものであるが、これは前節の [2-4] に紹介したので省略する。これによれば、提婆達多は法將軍と讃えられ、釈尊の後継者とも目された舍利弗⁽¹⁾ からも一目置かれていたことがあることが分かる。

- (1) *Suttanipāta* vs.555~557 (p.109) に、釈尊とバラモンとの間につきのような問答が交わされている。セーラ・バラモン「あなたは正覚者であると公言されています。では誰があなたの將軍なのですか。師の相続者である弟子は誰ですか。あなたの転じた法輪を誰が続いて転じるのですか」。釈尊「セーラよ、わたしが転じた輪、無上の法輪を舍利弗が転ずる。彼は全き人に従って現れた人です」。この他に次の資料がある。*Theragāthā* vs. 825~827 (p.079)、*MN.092 Sela-s.* (「施羅經」vol. II p.146) (この二經は同文)。『雜阿含』1212 (大正 02 p.330 中) では次のように述べられる。「佛告舍利弗。我不見汝有見聞疑。身口心可嫌責事。所以者何。汝舍利弗。持戒多聞。少欲知足。修行遠離。精勤方便。正念正受。捷疾智慧。明利智慧。出要智慧。厭離智慧。大智慧。廣智慧。深智慧。無比智慧。智寶成就。示教照喜。亦常讚歎。示教照喜。爲衆說法未曾疲倦。譬如轉輪聖王。第一長子應受灌頂。而未灌頂。已住灌頂儀法。如父之法。所可轉者亦當隨轉。汝今如是。爲我長子。隣受灌頂。而未灌頂。住於儀法。我所應轉法輪。汝亦隨轉」。また、『增一阿含』032-005 (大正 02 p.677 上) も次のように言う。「世尊告曰。汝今舍利弗。都無身口意所作非行。所以然者。汝今智慧無能及者。種種智慧無量智慧。無邊之智無與等智。疾智捷智甚深之智平等之智。少欲知足樂靜之處。多諸方便念不錯亂。總持三昧根原具足。戒成就三昧成就智慧成就解脫成就解脫見慧成就。勇悍能忍所說無惡不爲非法。心性庠序不行卒暴。猶如轉輪聖王最大太子當紹王位轉於法輪。舍利弗亦如是。轉於無上法輪。」

[1-2] その他の A 文献資料には次のようなものがある。

- (1) 提婆達多の弟子である月子比丘が舍利弗を訪ねた。舍利弗が「提婆達多はどのように説法するのか」と問うと、月子比丘は「提婆達多は『比丘の心法が心を修せば、是の比丘は能く自ら我れ已に離欲し、五欲の功德より解脫したと記すことができる』と説く」と答えた。舍利弗は「『比丘の心法が善く心を修せば、欲心を離れ、貪瞋癡を離れて、無貪法無恚無癡法を得、この比丘は自ら我生已盡、梵行已立、所作已作、自知不受後有と記すことができる』と説くべきである」と言った。『雜阿含』499 (大正 02 p.131 上)
- (2) チャンディカープッタは、デーヴァダッタが以下のように説いたという。「比丘が心によって心を鍛錬すれば (yato …… bhikkhuno cetasā cittaṃ citaṃ hoti)、その比丘は『生まれることは尽きた。梵行はすでに完成した。なすべきことはなされた。後に輪廻の状態はないと私は知っている』と〔自身を〕記別するに相応しい」と。しかし舍利弗はそれを訂正し、デーヴァダッタはそう説いたのではなく、「比丘が心によって心をよく鍛錬すれば (yato …… bhikkhuno cetasā cittaṃ suparicitaṃ hoti)、その比丘

は『生まれることは尽きた。梵行はすでに完成した。なすべきことはなされた。後に輪廻の状態はないと私は知っている』と〔自身を〕記説するに相応しい」と説いたのだとする⁽¹⁾。AN.009-003-026 (vol.IV p.402)

- (1) PTS の校訂ではチャンディカープッタによるデーヴァダッタの言説も、舍利弗によるデーヴァダッタの言説も、等しく「比丘が心によって心をよく鍛錬すれば (*yato …… bhikkhuno cetasā cittaṃ suparicitaṃ hoti*) 」とするために文意がつかめなくなっている。ビルマ版ではチャンディカープッタによるものを ‘*cetasā cittaṃ hoti*’ とし、舍利弗によるものを ‘*cetasā cittaṃ suparicitaṃ hoti*’ と区別しているが、チャンディカープッタによるものは、意味が明瞭でない。Nyānatiloka 訳 Nyānaponika 改訂の独訳の註 (*Die Lehrreden des Buddha aus der Angereihten Sammlung, Band IV, 5. Aufl., Braunschweig, 1993, p.241*) にしたがって、チャンディカープッタの言説を ‘*cetasā cittaṃ cittaṃ hoti*’ と補って読み、ここでのチャンディカープッタと舍利弗の言説の違いを「鍛錬する (*cittaṃ*) 」と「よく鍛錬する (*suparicitaṃ*) 」の違いにあると見る。対応漢訳の『雑阿含』でもチャンディカープッタ (月子) によるデーヴァダッタの言説を「比丘心法修心」とし、舍利弗によるデーヴァダッタの言説を「比丘心法善修心」とする。

B 文献資料には次のようなものがある。

- (1) 王舎城の市民たちが舍利弗と提婆達多のどちらに袈裟を布施するかで多数決をとり (*sambahulikam karontesu*)、提婆達多に布施した。 *Jātaka 221 Kāsāva-j.* (vol. II p.196)
- (2) 舍利弗の布施についての説法を聞いた在家信者が 1000 人の比丘を食事に請じた。そのため街の人々から寄進を集めた。ある人が「もし不足ならばこれを売って使ってください」と言って高価な黄衣を提供したが、売る必要がなかったので誰に差し上げるかが問題となった。ある人は「舍利弗に」といい、ある人は「舍利弗は収穫時期のみ来るが、デーヴァダッタは何時も一緒にいてくれるから彼にあげるべきだ」と主張した。長い議論のうえデーヴァダッタに渡すことになった。これを聞かれた釈尊は「彼が似合わない黄衣を着るのは今度が初めてのことではない」と前世の象師の話を読かれた。 *Dhammapada-A.* (vol. I p.077, Burlingame 訳 Book1-7, vol. I p.189)

これらは、提婆達多が舍利弗と拮抗するような時期があったことを示している。後に触れることであるが、提婆達多は釈尊とさえ対抗するほどの供養を得たとされるのであるから、これは当然といえば当然かも知れない。

[2] 次に提婆達多と阿難との関係について調査する。

提婆達多と阿難との教団活動における関係については、【7】「破僧」を検討する項において紹介する資料を除いては、次のような釈尊を介しての関係のみであって、その個人的な関係を述べる資料は見出せない。これによっても提婆達多と阿難が兄弟であったとすることには疑問符がつく。

- (1) 釈尊は 500 人の比丘らと共に迦蘭陀竹園に住されていた。そのとき釈尊は乞食のために王舎城に向われた。釈尊は城内で乞食していたとき、提婆達多も乞食していたので去ろうとされた。阿難がその理由を尋ねると、釈尊は「悪知識と共に事に従うこと莫かれ、愚人と共に事に従わば信なく、戒なく、聞なく、智なし。善知識と共に事に従わば、諸

の功德を増益し、戒具成就せん」と説かれた。『増一阿含』023-006 (大正02 p.613 下)

兄弟関係、出家時期の箇所を検討したように阿難の提婆達多に対する態度は、きわめて第三者的、傍観者的で、親しみや敬意などの姿勢を伺うことはできない。